



脊柱管狭窄症になって

原田 公喜

まず、総合せき損センターにめぐりあった幸運と幸せに感謝したいと思います。なぜなら現在の医療制度において、多くの病院では患者が納得していないにも拘わらず、退院しなければならない事が多いからです。総合せき損センターは、手術だけして後方病院に送るということをせず、どれだけ時間をかけても出来る限りの治療をし、患者が納得したところで退院という「一病院完結型」の方針を堅持している事です。

更に、常勤のドクターが整形外科12名のうち、脊椎脊髄外科指導医11名と充実しています。しかも脊髄指導医の条件のなかに、脊椎脊髄の手術を300例やっている事です。ちなみに多くの病院では年間50例から100例くらいと云われています。総合せき損センターでは、年間800例近い実績だそうです。そのあらわれとして患者の満足度は85%、入院に関して93%と言う事からも分かります。また患者は県内が85%、県外が15%になります。

私の最初の痛みは、10年程前に左のふくらはぎが痛み始め、5～6年後に右のふくらはぎが痛み始めました。その痛みは筋肉痛だと思い、歩けばやわらぐと思いました。歩く事と整体で努力しましたが快方にむかいませんでした。その後、有明カイロプラクティックで1年程治療しましたが、完治とはなりませんでした。その頃になると後膝と尻が痛みはじめ、以前より間欠性跛行（はこう）が多発しました。飲酒で痛みを我慢してきましたが、限界だと思い病院に行く決心をしました。

悩みとしては、痛みをまわりの人に理解して載くことの難しさと、自分の挫けない気持ちをどうもち続け、良い方向にもっていき辛さをどう理解してもらえるかがなかなか伝えられないことが長いあいだ続いたことです。

入院に際しては、妻の理解と、仕事の忙しいなか時間を都合してくれた子供2人の協力が本当に嬉しく思いました。また母が100歳近い為、入院の間姉に面倒をみて載きました。おかげさまでみんなの協力を得られ、感謝の気持ちで一杯です。かわいい猫【ふく】がきっと私のかわりに妻を慰めていると確信しています。というのは、猫は人の感情を敏感に感じる能力を持っており、生後3年ぐらい話しかけることで言葉を覚え・理解しているからです。ただ、猫は話せないだけといわれています。

総合せき損センターに於いても、主治医さんをはじめ看護師さん方の昼夜を分かたず献身的な看護に、ただ感謝の気持ちで一杯です。私もりハビリに励み、1日も早く退院できるよう希望に向って邁進します。

